

# 「自由は公共放送にこそある」

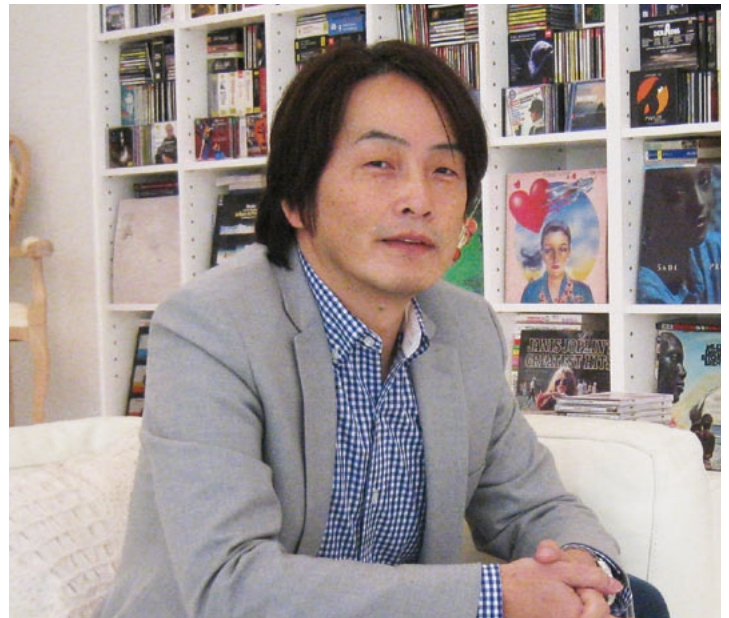
『池袋ウエストゲートパーク』  
 そう。街のなんでも屋「マコト」が事件を  
 解決していくあの推理小説だ。

えっ、知らない？

じゃあ、その作者、直木賞作家の石田衣良氏は  
 知っているよな？

時事問題や社会問題に焦点を当てた質感溢れる  
 スタイリッシュな文体で  
 若い世代や女性から支持を集める、  
 あの人気作家だ。

作詞も手がければ、  
 テレビのコメンテーターもする。  
 映画に俳優として出演したことだってある。  
 まさにマルチな才能を発揮する石田氏の目に  
 公共放送NHKは  
 どのように映っているのだろうか。



## 石田 衣良 直木賞作家

### プロフィール

60年生まれ。直木賞作家。成蹊大学卒業後、数々のアルバイトを経て広告代理店  
 に就職。36歳のとき『池袋ウエストゲートパーク』で第36回オール読物推理小  
 説新人賞を受賞し作家デビュー。2003年には『4TEEN フォーティーン』で第  
 129回（上半期）直木三十五賞を受賞。若い層を中心に幅広い人気を得ている。

### 人気小説『池袋ウエストゲートパーク』

——『池袋ウエストゲートパーク』はテレビ化もされ本  
 当に話題になりましたよね。

『池袋ウエストゲートパーク』はテレビなんかと同じで、  
 ある種ジャーナリスティックな小説なんです。ひたたく  
 りとか、引きこもりとか、子どもの放火の事件とか……。な  
 るべく目の前で起きていたことをさっと瞬間冷凍して、鮮  
 やかに出したかった。そういう切り口が良かったのかも知  
 れません。

——シリーズのなかには社会の陰の部分というか、いわ  
 ゆる表舞台で暮らしていない人たちがたくさん出てきますが、  
 もともと、そういう人やモノに興味があったんですか。

学生時代からモノをちゃんと見よう、特に汚れているも  
 のをちゃんと見ておこうっていう意識はありましたね。お  
 かしなもの、汚いもの、そういうものがきれいになるまで  
 ちゃんと見る。そういうことができるのが小説家であって、  
 一つの文学として表現する方法だと思っただけです。

ディレクターなんかと同じ作業をしていると思えますけ  
 ど、普通の人は目を背けることでも、じつと見ていると  
 見えてくるものがあるじゃないですか。

たとえば、渋谷の街を歩いていて、なんかちよつと薄汚  
 れている。普通の若い人と一緒なだけで、ジーンズを履  
 いてダウンを来てデイバックを背負っている。でも靴が汚  
 れていたり、ダウンジャケットのところに同じ色のガムテ  
 が張ってあったりするんですね。顔色が良くないし。何  
 時間もたつと、同じ所を歩いていたりして。「あれっ、何だ  
 ろう？この人たち」っていったら、ネットカフェ難民だっ

たりする。そういうことを見つめる、それって大事なことなんじゃないかな。

そういう目はプロになってからさらに養われましたけど。でも、そんなに焦らなくてもいいと思う。人生長いし。社会のルールから外れた人も、いいんじゃないのかなあ、ゆっくり自分なりの働きかたを探していけば。ただ、社会の側はそういう人たちがいることに関しては気がついて欲しいですね。

——そういう情報を得るためには、やはり現地に行つての取材。

取材することはしますけど、そんなにはしませんね。だから情報源はバラバラです。友達の話であつたり、新聞の小さな記事であつたり。

たとえば、ある記事で北海道の落盤事故に巻き込まれた若い鉱夫のことが載っていたんですね。ダ〜って土砂が落ちてきて、意識を失う直前に彼は「天国の音」を聞いたつて。「なんだそれ？」つて。その人は運良く救出されたんですが、病院で見たら、下半身がつぶれているんです。ぐしゃつと。「天国の音」つて言うのは背骨が碎ける音なんですよ、自分の。

でも、考えてみたらそうなんですよね。速い音つてきれいに聞こえる。空気を伝わってくるのではなく、自分の体のなかの固いもの、骨伝導で聞こえてくる音は最速なはずできれいなわけだから、「天国の音」に聞こえたんでしょうね。なくんていうのを読むと『骨音』という小説になるわけです。

——本当にちょっとした引っかけが、小説になるんですね。

小説工場みたいなものを作家はみんな作らなければいけないですよ。そこにたとえば、落盤事故とライブハウスと池袋の子どもたちを投げ込むと小説が一つできる。それをいつもいつもとろ火で動かしていなければいけないです。だから寝てる間も火は落とさない。

作家つて自分で意識して頭で考えてやっているとダメなので、無意識をうまく使うコツを覚えなきゃダメなんですよ。それつて、ディレクターがアイデアだったり企画を考えたつたりと似てませんか？ず〜つと考えて色んな資料を集めたり、話を聞いたり、煮詰めて煮詰めて。でも、ある日、それを一回忘れて、別なことに集中しているときなんか、アイデアがポツと浮かんでくる。なので、ぎゅーつと圧力をかけるのと、抜いてやる、意識的な努力を辞めてしまふ、つていうプロセスをうまく使い分けるのが大切なんですよ。

あとね、自分のテーマを2年とか3年かけて作つていく。モノ作りをする人は、バツハでも経済でも俳句でも何でもいいんですけど、2、3年間没頭し続ければ、何かが見えるじゃないですか。

というよりも、テーマを追求するというのは本当に面白いですよ。20年それをやり続ければ、7つか8つはたまるわけです。自分が面白いな、好きだなつて勉強したこと、は本当に自分の武器になりますからね。それをちゃんとやっている人はどんな会社でも取締役ぐらゐまではいくと思えますよ。でも、みんな気がつかないし、ぼーっとしていてやらないんだよね、それに自分の仕事もあつて忙しいから。でも、そういうのをやるかやらないかで差が付くと思えますよ。

——小説にもメッセージがありますけど、ゴールはあらかじめ決めて「小説工場」に素材を入れているのでしょうか。それとも…。

あらかじめメッセージを持ってたらダメなんですよ。つまり、一番、最初に「原爆反対」みたいなことを訴えようと思ったら、その小説はダメ。だったら、原爆反対ってデモしてる方がいいんですね。

小説の場合、ために構成していくのではなく、大きな流れのなかでじわじわと盛り上がって、あっ、こういう気持ちたちが伝えたかったんだ、こういうことだったんだって自然に出てくるのがいいんですね。映画でもあるじゃないですか。いままでずっと笑ってたのに、あれっ？なんで泣いているんだろうっていうような。そういうものの方がすごくグサツときますよね。

でも、構成するものなかでさえ、これが自然とできちゃったんだっていう、そういう風に見せられるような力量が持てたら凄いですよね。毎回毎回の構成で、ちゃんと考えて作っているのに、自然にわき出てしまう。それが、僕たちの理想の仕事となるんじゃないですかね。テレビのドキュメンタリーの枠で毎回それができるのかというところ、難しいでしょうけど、そういうひとつの理想を持っていた方がいいような気がするなあ。

## テレビは毒？

——小説のなかにテレビは毒という表現がありましたけど、これは。

ゆっくりゆっくりと回ってくる毒。瞬間的にはないですよ、人間の考え方だったり生活感だったり、世界を見る見方を変えてしまう。そういうところがあると思うんですね。

テレビという媒体自体が。

たとえば、70年代のテレビは海外の新しいことを知るための窓だった。海外のドラマがばんばん流れ、海外ニュースも多かった。アメリカは豊かだ、世界はこんなに凄いいだつていう風に、『兼高かおる世界の旅』<sup>※1</sup>とかはそうですね。それが内向きになると、いまの若い人たちは、海外に対する興味がほとんどない。海外のドラマはほとんど皆無。韓流ぐらいですよ。相互作用かも知れないけど、そうすると興味を持たなくなりますよね。

つまり、テレビでずっと見ているものが世界の成り立ちだし、こういうものが世界だつて思い込んでしまう。箱の世界が世界観につながってしまうわけです。そうならないためには、たぶん見る側が努力をしなくちゃいけない。それが本であったり、自分の目の前にある世界だったり。テレビとは違うバランスを作っていかなければならないですよ。

——ネットの発達でどんどんフィルターを通さない素材が氾濫してきています。情報過多のなかでどうすればバランスを保てると思いますか。

それに関してはネットみたいなメディアが出た瞬間から仕方がないですよ。だから、結局、自分のなかに、2つとか3つの段階の考え方とかを作っておくべきだと思いますね。

目の前で瞬間的なことが起きますよね。たとえば、それは、この前の中目黒の殺人事件、あるいは尖閣の問題でもいいですね。僕もコメントターみたいなことをしますから、あまりよく知らないし、詳しくは調べられないけれど、あの瞬間に何かに関して判断しなければいけない。でつ、そ

※1 「兼高かおる世界の旅」

TBSで31年間放映された本格的海外取材番組。世界各地のいまだ日本人に馴染みのない国々をめぐって、その風俗・文化・歴史や地理・物産などを紹介した。訪れた国の数は150か国あまりにのぼる。

れとは別にたとえば、自分にとっての世界観、これからアジアはどうなっていくんだろう、日本はどうしたらいいんだろう、みたいな、中長期的に考えるの、それは2年とか3年とかのスパンで考える。さらに、それとは別に自分のライフワークだったり、仕事の目標だったりという、10年20年のスパンで考えるもの。そういうスケールを3つぐらい持って、目の前で起きていることを瞬時に振り分けていくようなことが大事だと思いますね。

ただ、そのときに気をつけなければいけないのは、目の前で起きていることだけでも、20年枠に入ってくるものもあるかも知れないですよ。エジプトのデモみたいなことはそうだし、ベルリンの壁の崩壊だって、あの時、突然、崩れたわけではないでしょ？だから、そういうことをきちんと考えながら仕分けしていく。報道をする人や、何かを作る人は当然ですが、理想をいえば、お笑い番組を見ている視聴者がみんなそれを持っているといいですよ。

### バランスを取りながらもっとえぐい番組も

——NHKはどのような番組を出していけばいいと考えられていますか。

テレビが試行錯誤をやってみせるのが大事だと思いますね。勢いがある上り坂の時代は、それこそヒットパレードみたいな番組がいいと思います。でも、いまは、みんなが立ち止まってじっくり考えようかなって思っている時代になっていると思いますので、それに応える何かを提供する。言っただけですが、お行儀の悪いものであったり、先鋭的なものであったり、というものを出していくと思いますね。極端に言えば下品でもいい。テレビとかジャーナリスティックなメディアは本来行きすぎるものなんですよね。

でも、いまのテレビはあまりにも清潔になりすぎた、保守的になりすぎたって気がしますね。不倫ドラマがダメだったり、暴力の追放だったり。構図は清潔で潔癖なものに流れているんですが、果たしてその裏で日本人の心というか、モラルが強くなっているかというところ、脆くなっている気がするんです。

公共放送だからできないではなく、公共放送だからできる『セカンドバージン』みたいなものが大事なんです。若い人がテレビを見ないですから、中高年以上の男性女性がしっかり見られるようなものを、ちゃんと密度のある題材で作る。公共の部分というのは、バランスだと思っただけですよ。

そういう意味では、NHKがうける部分に関しては、手放してはいけないですよ。地方の方でお年寄りなんか朝から晩までテレビをつけているけれど、ほぼNHKというチャンネル固定じゃないですか。そういう安心感を与える。CMでいえば、三木のり平の『ごはんですよ！』みたいにがちり浸透しているものを守る。NHKでいえば、大河だったり、朝ドラだったり、ニュース7だったり。

そのためには、やっぱりいい取材をして丁寧に番組を作って、いまの時代の切り口にあったアレンジを施して、どんどん出していく。それを飽きずに繰り返ししていくってことしかないと思いますね。本当に面白いドキュメントっていうのは、あつという間にさらっていくでしょ。

この前、筒美京平さん<sup>※2</sup>のベスト盤を聞いたんですけど、やっぱり凄い。きちんと売る。きちんと聞かせる。若い子に届くメロディーをちゃんと作っている。30年ぐらいやっているんですけど、やっぱりこのガッツだと思えますね。簡単にあきらめないし捨てない。スランプに陥ってもかいくぐって次を出していく。それをやらないとね。やっぱり、



池袋西口公園 © oomml

みんな、ちよつと、人のせいにしすぎる。上司が悪い。時代が悪い。見る客が悪い、と言って、自分でどつか投げています。でも、投げてしまったらアウトなんですよ。そういう中で必ず見てくれる人はいるし、擁護をしてくれる人もいるので、あきらめずに新しいものを持ち続けてぶつかっていかないと、それを続けないとダメですよ。

——手前味噌で恐縮ですが、出演されている『ハートをつなごう』<sup>※3</sup>はそういう意味では面白いと思うのですが、いかがでしょう。

本当に面白いですよ。掘り下げるテーマもドンドン広がっているし。なかなか、当事者と話つてできませんから。いままでも福祉番組はありましたけど、なんていうんでしょう。上から見て可哀想だから助けてあげよう的なものが多いです。でも、実際に当人たちから話を聞くと目から鱗のネタが出てくるじゃないですか。垣根を壊しますよ。

前にゲイの男の子に言われたことがあるんですが、「マッコさんとかミッツさんとか、それを職業にしている華やかな女装家だったりするゲイの人はテレビのなかであんなに活躍しているけど、自分と同じように普通に制服を着て学校行っていたり、ネクタイを締めて会社に行っている人のテレビは『ハートをつなごう』が初めてです」って。自分もあんな風にならない

ければいけないのかなとか無理しなきゃいけないのかなって、不安に思っているところに普通の人をさらつと、自分のモデルを見せられる、と、やっぱり嬉しいんじゃないですかね。

人間って面白いのは面白いんですよ。欠けているし求められている。

でも、これからは難しいでしょうね。不景気によってみんなの心が頑なになっていきますから、どんなに思い込みだけで、生きるようになってしまおう。だからこそ、そういう固くなった心と体をほぐしたり、ストレッチしたりする。それらもやっぱりテレビの大きな力なのでやって欲しいですね。

### 「大人」の番組希望

NHKは民放よりは視聴者の層の設定は高くしていますけど、もうちよつと大人の設定にするのはどうでしょう。まだまだ文化教養番組の質が低いと思うんですよ。本当にこの人の話を聞きたいって言う人が出てこないんですよ。どうしてもテレビ的な世界が分かる人を使いやすい、安全だということを使うけど、もつと、新しい個性を開拓したらどうでしょう。テレビの草創期はもつと在野の面白い人を出して面白かったですよ。

専門家とアナウンサーだけで組んでるやつじゃダメですよ。ホントにつまらない。あれは、やっぱりその専門性のなかから引きずり出すような仕掛けが必要だし、基本的に自分だけの解説で終わっちゃうところが多いですから。やっぱり、会話自体の面白さだったり、広がりだったり、そこにちゃんとユーモアもあったりというよう。そこに本だったり、映画だったり、テレビ自体の評だったり、ク

※2「筒美京平」作曲家。作品の総売上数は7600万枚を超え作曲家歴代1位。ヒットチャートランクインは500曲以上。『ブルーライト・ヨコハマ』『魅せられて』『仮面舞踏会』などがある。

※3「ハートをつなごう」2006年4月からNHK教育テレビ「福祉ネットワーク」の枠内で放送している福祉情報番組。発達障害、性同一性障害、ひきこもり、シングルマザー、貧困、ゲイ/レズビアンなど、マイノリティーに焦点を当て、時に困難と向き合いつながりながら今を生きる一人ひとりの体験に耳を傾け、語り合う。

リテイクなものが入ってきて面白と思うんですよ。よくあるじゃないですか。海外のパーティーとかだと本が話題になる。ああいう場所で番組が話題になるような、そういう日本製のすごく質のいい「大人のトークショー」みたいなものが見たいですね。

## インタビューを終えて

「下品でも良い番組」。これは、NHKが放送を出している上の文法にはなかなか当てはまらない言葉です。しかし、私には「視聴者を意識しすぎている」という言葉に聞こえました。言い換えれば、「視聴者の顔を窺いすぎて、振り切れる放送」が出せていないということではないでしょうか。

確かに、いま、NHKは番組一本一本のなかでバランスを取ろうとすることが多いように感じられます。それでは、常に「金太郎飴」。面白味に欠けてしまいます。でも、極端な話、大きく振れた2つの番組を出しても、局としてみれば、バランスを取れるということも言えるのではないのでしょうか。

NHKは現在テレビ放送を4波で行っています。これほど潤沢な波を持っている放送局は日本には存在しません。であるならば、同じネタをそれぞれ違った視点から切り取り、番組を仕立てることで、バランスを取ることでもできなくはありません。

昔のテレビは「振り切れた」番組がたくさんありました。過激だったと言ってもいいでしょう。でも、それだけ縛りを気にせず自由に表現をしていた時代だったといえます。

しかし、いまは、面白ければそれで良いという時代ではありません。それゆえ、極端な番組が良いと言うことではありませんが、時には覚悟を決め「振りきれた」番組を出す。民放にスポンサーの縛りがあり、萎縮しなければいけないのであれば、そういった放送を「自由」に出していくのも公共放送の一つの役割なのかもしれません。むろん、自由をはき違えてはいけません。

報告 中央放送渉外部長 竹内哲哉